

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第4章



アヴィニョン市 ～ 1347年5月

午後の空気は雨の匂いで重く漂い、西の空は真っ黒だった。

リーン枢機卿はイギリスからアヴィニョンに到着し、厳重に警備された馬車に乗ってマロウ城の中庭に威勢よく乗り込んだ。一行の歩みから舞い上がった砂埃は、迫りくるリーン枢機卿の前に集まった渦巻く砂塵の雲に飲み込まれていった。

嵐の中、馬車が入口に近づくと、リーンは前に座り、窓から外を覗き込むと、先遣隊の何人かがぼうぜんと歩き回っているのが見えた。

リーンの護衛隊長は馬を駆り立てて前進させながら、よろめく護衛兵たちを叱責した。「気をつけ！立て！」しかし、誰も彼の命令に従わなかった。隊長は馬の手綱を引いて、一番近くにいた馬を掴んだ。「軍曹！ここで何が起きているんだ？すぐに説明しろ！」

「今すぐ答えろ！」軍曹は酔っぱらって気を失いそうになりながら、ぼんやりと顔を上げた。目は焦点が定まらず、口は言葉を紡ぎ出すのに苦労していた。

「もうこの馬鹿げた茶番劇はたくさんだ！」枢機卿は怒鳴った。リーンは馬車から飛び出し、風に飛ばされないようにつばの広い帽子に手を添えた。

隊長と他の護衛兵3名が枢機卿に加わり、リーン一行は城に入った。2階では、枢機卿バジリステの寝室に近づくとつれて、一定の低い唸り音が強くなった。一行は部屋に飛び込み、凍りついた。数名がうめき声をあげ、目をそらした。リーン枢機卿はハンカチを取り出して鼻と口を覆い、護衛兵の一人が開いた窓に駆け寄り、嘔吐した。

リーンの前には、黒く膨れ上がったバジリストがベッドの中で硬直し、顔にはスズメバチが群がっていた。虫たちは開いた窓から出入りし、頭のくぼみから刺されたウジを運び出していた。死んだ枢機卿は、硬直して腐敗し、汚れたコインのように目が床に乾いていく中、少しも苦しんでいる様子ではなかった。リーンは窓の外を見て、近づいてくる嵐の風に揺れる遠くの木々の梢の方を見た。それから彼は、部屋の暑く、よどんで、息苦しい室内に目を戻した。その静止した空気は、かすかなラベンダーと古びた人間の排泄物の痕跡で汚染されていた。数匹の虫がドラムを叩きながら彼の体を探り、頭の周りをブンブンと音を立てる光輪のように飛び回り、旋回していた。

しかし、リーンはそのような細かいことにこだわる男ではなかった。彼は部屋の調度品をより詳しく調べ、机の上に置かれた羊皮紙に目を留めた。彼はさらに詳しく調べるために前に進み出た。リーンは、自分宛ての枢機卿の最期の言葉が書かれた羊皮紙を持ち上げた。その直後、一行は来た時と同じくらい急いで城を出た。リーンは歩きながら手紙に目を通した。「外典だ！風のように急げ！」彼は馬車に飛び込みながら唸った。「すぐに乗れ！」隊長は鞍に飛び乗りながら護衛に怒鳴った。

男たちは急いで馬に向かった。隊長は馬に鞭を入れ、一行の先頭に立った。馬車はガタガタと揺れ、勢いよく前方に飛び出した。リーンは手紙から目を離し、身震いした。24人の兵士からなる突撃部隊を率いて、枢機卿はローヌ川の橋を西へ渡り、アヴィニオンを離れ、外典の地へ、そして地平線を飲み込む巨大な雷雲へと向かった。しかし、リーンの注意は、外典会議、そして会議に関するあらゆる事柄を知らないままの教皇クレメンスに対する重大な責任に奪われていた。

ザビエル枢機卿とバジリステ枢機卿が暗殺された後、リーンは上級評議員として最後に残った人物となった。評議会が5世紀近くにわたって秘匿してきたすべての事柄が、今や彼の肩にかかっていた。教会法ではキリストの代理者、すなわち統治する教皇が評議会の最高位のメンバーであると定められていたが、リーンはクレメンスに直接接触するのは困難、あるいは不可能かもしれないと認識していた。クレメンスは以前、枢機卿として、外典評議会の立場を強化すると思われるいかなる提案にも激しく反対していた。クレメンスは常に

公会議が枢機卿団の権威を損なうものだと感じていたリーンは、教皇になったからといってクレメンスが考えを変えたとは到底思っていなかった。それでも、必要であれば力づくでもクレメンスとの面会を実現させようと決意していた。そして、もしそうなった場合、外典公会議の歴史上かつてない行動、すなわち外典の保管庫から証拠を持ち出し、クレメンス本人に直接提示することで、その反抗行為を正当化する覚悟だった。

リーンとクレメントは性格が正反対で、衝突し合っていた。二人ともそれを自覚していた。リーンは口数が少なく、謙虚で、用心深く、誠実な男だった。一方、クレメントは無神経でせっかちで、贅沢で社交的な生活を楽しんでいた。教皇としての彼の態度は、神の厳格な使者というよりは、むしろ粹な君主のようだった。二人の会話は、形式的で短く、ほとんど何事もなく終わった。

クレメンスが即位して以来、バジリステ枢機卿は外典に関する問題で教皇に何度も謁見を求めた。しかし、その都度、宮殿の新設、国政、財政、税制など、より緊急な問題がクレメンスの即座の対応を必要としているという理由で、謁見は拒否された。クレメンスはバジリステ枢機卿の死後も、最高評議会に新たなメンバーを任命することを怠り、その怠慢によって、かつて強力だった評議会は衰退の一途を辿った。

衰退していくのは、ほぼ間違いなく彼の意図的な怠慢によるものだった。しかし、リーンにはもはや選択肢がほとんどなく、クレメントに無理やり迫り、古来より続く外典評議会に対する彼の責任を思い出させるしかなかった。

公会議は1334年、教皇ベネディクト12世の命令により建設された。教皇はローマへの教皇権復帰を公言していたにもかかわらず、バチカンからすべての教皇文書をフランスの新たな拠点へと移した。墓のような建物は、広大で湿潤なローヌ川の谷間にあり、三方を二次林と棘のある低木に覆われた険しい渓谷に囲まれていた。東にはアヴィニヨンの城壁が川の谷を見下ろすようにそびえ立っていたが、西に行くと、街の壮麗さは悪臭とともに薄れていった。

ローマ教会の紋章を掲げた厳重に警備された馬車が、背の高い常緑樹の林に遮られた、険しく轍だらけの道を苦労して登り始めるまで、1時間も経たなかった。木々の背後に暗くそびえ立つ石造りの城壁は、その向こうの空と同じ黒色をしていた。空は舞い上がる灰のように濃くなり、風向きは変わり、氷のように冷たくなった。閃光、雷鳴そして突然、大粒の雨が降り始め、土砂降りの雨へと変わった。リーンの従者たちは、泥だらけの狭い道を苦労して登り、数人の馬から降りた泥まみれの護衛が馬車の後ろに押し付け、力を合わせて馬車を進ませようとしていた。

前へ。彼らはそれを水たまりから引き上げ、一歩ずつ、一歩ずつ前進した。稲妻が前方の道を照らし、常にそびえ立つ外典のシルエットを浮かび上がらせた。

威厳ある石造りの要塞の外観には、窓が一つもなかった。唯一の入り口は、昼夜を問わず評議会の衛兵によって警備されていた。彼らは、肉体と意志の強さ、そして揺るぎない忠誠心を持つ者として、上層評議会によって厳選された者たちだった。フィリップ王の王室護衛隊の厳格な規律さえも、これに比べれば微々たるものだった。その厳重に守られた壁の中には、生きている人間にはごくわずかな者しか知らない聖典の言葉が収められていた。エノク書、ヨベル書、巨人書、ソロモン書などの完全な聖典から、千年もの間地上で聞かれなかった言語で書かれた古代の巻物まで。そして、はるか昔に破壊されたアレクサンドリアのギリシャ図書館の遺物から、大洪水後の年月を詳細に記し、ユダヤ教の神殿から没収されたアッシリアの粘土円筒まで。

初期の十字軍の時代、外典の内容には教会のあらゆる秘密が収められており、それらは厳重に守られていた。

リーンは、枢機卿がほぼ暗記している4冊の外典に収められた資料を探し求めた。外典から何かを取り除くのは良識に反することだったが、目の前の課題、つまり正気な人間なら誰も真実だとは信じないようなことをクレメンズに納得させるという任務には、他に良い方法が思いつかなかったのだ。

4冊の巻物のうち最初の巻物は『スタチュー・フィジーク』で、その中でも最大の巻物でした。そこには公会議修道院とその2つの門石の詳細な記述が収められていました。また、それぞれの歴史も記されていました。最初の門石は876年、王の治世中に発掘されました。

教皇ヨハネ8世の治世下。イタリアの教皇領内、ウンブリアの山岳地帯に位置するこの発掘現場は、古代サムニウム人の集落跡でもあった。2つ目の門石は、教皇ステファヌス6世の治世下、877年に発見された。

現在のフランスのオーヴェルニュ地方では、その一枚岩はロワール川の南にある岩だらけの丘の上にそびえ立っていた。

2冊目の書物は「評議会宣言」でした。そこには評議会の歴代会員名簿が記載されていました。上院と下院に仕えた歴代の教皇と評議員全員の名前が記されていました。また、評議会の規約も含まれていました。

3つ目の拘束力は、1336年に教皇ベネディクト12世によって書かれた宗教改革除外条項でした。これらは教皇勅書「レデンプトル・ノステル」に対する教会法上の修正または除外条項でした。これにより、公会議は2つの修道院を、

適切だと判断した。

リーンが探し求めていた4番目にして最後の文書は、ナラムシン翻訳、すなわち上層評議会が「門石の翻訳」と呼んだ文書であった。これらの脆い製本された文書は3世紀前に遡り、修道院の書記官ナラムシンにちなんで総称された。ナラムシンは、献身的な奉仕と信仰心によって、フランスの石碑の碑文を独力で解読した、故ガルディアン修道院の聖職者であった。これらの翻訳は、フランスの石碑に刻まれた奇妙な言語をラテン語に訳したものである。そして、イタリアの石碑の碑文も同一であったため、ナラムシン文書はフランスとイタリアの両方にある門石の翻訳として用いられた。

リーンは、4つの文書のどれでも、無知な教皇に迫りくる真の危険を気づかせるのに役立つかもしれないが、教皇をリーンの支配下に置くには4つすべてが必要になるだろうと知っていた。外典の支配権。評議会が生き残るためには、彼にそれを理解させなければならない。リーンの馬車が止まり、彼はその扉から外を覗き込んだ。激しい雨の中、人影が二列に並び、鉄の鋏で固定された巨大な扉 外典への入り口 を挟むように集まっているのが見えた。

アポクリファの内部、そしてその巨大な扉の向こうでは、壁の松明が廊下の入り口に並ぶ十数名の毅然とした衛兵を照らしていた。扉の向こう側では、槍の柄が扉を叩く音が響き、続いて「アポクリファ評議会の枢機卿リーン閣下の命令により、開けろ！」というくぐもった声が聞こえた。

二人の警備員が鉄格子を外し、力を振り絞って扉を開けた。カーディナル・リーンそして、彼の隊長は激しい雨でずぶ濡れになりながら、慌ただしく通り過ぎていった。二人が通り過ぎると、衛兵たちは頭を下げた。扉は重々しい音を立てて閉まった。リーンと隊長は歩みを緩めることなく、薄暗いホールへと姿を消した。二人の衣服から滴り落ちる水滴が敷石に跡を残し、その石には廊下の松明の炎が揺らめくように映っていた。

リーンが角を曲がり、廊下の突き当たりに近づくと、6人の警備兵が突然姿を現した。彼らは、精巧な彫刻が施され、きらめく金属板がはめ込まれ、宝石がちりばめられた、高く豪華な装飾の扉の前に立っていた。

ギリシャ文字で「アポクリフォス」という文字がキーストーンの上に刻まれていた。門番が手を上げて手のひらを外側に向けて前に進み出た。「止まれ！」彼の後ろにいた衛兵たちも武器を構え、重々しい鉄の鎧の音がホールに響き渡った。リーンは門番の前で立ち止まり、門番はこう続けた。「その性質を述べよ」

リーンは素早く手を払い除け、「時間がない！」と言って身を乗り出し、両手を合わせて軍曹の耳元で通訳の言葉を囁いた。兵士はくると向きを変え、踵を鳴らし、門番たちに「枢機卿リーン閣下に道を譲れ！」と命じた。

警備員たちは慌てて道を空け、軍曹は大きな真鍮の鍵を錠前に差し込んだ。彼らはそびえ立つ扉の真新しい木製の板に肩を深く押し付け、扉が開いた。うなり声を上げ、ゆっくりと開いた。リーンは警備兵の一人から渡された懐中電灯を受け取ると、新たにできた隙間をくぐり抜けた。背後で、巨大な扉が轟音を立てて閉まった。反響音が消え、静寂が彼を包み込んだ。静寂の中で。暗闇 聞こえるのは、彼自身の呼吸音と、松明の炎が絶えず吹き続ける音だけだった。

リーンは決意に満ちた足取りで暗闇の中を進み、壁に立てられた無数の松明に火を灯した。枢機卿が闇を払い去ると、巨大な部屋が姿を現した。壁沿いには無数の書棚が並んでいた。通路を幾重にも交差する書棚には、写本、巻物、銘文入りの粘土円筒など、聖座の秘密である膨大な種類の文書が収められていた。リーンは空の書棚にトーチを固定した。

棚の側面に取り付けられた懐中電灯ブラケット。目の前には広々とした読書テーブルが照らされていた。彼はテーブルの上の数脚の木製スツールのうちの1脚を持ち上げ、急いで降りていった。

棚が何列も並んでいた。彼は角を曲がった途端、凍りついた。血管に氷と恐怖が走った。数ヤード先には、すでに踏み台が立っていた。彼は持っていた踏み台を放り出し、もう一つの踏み台へと走った。

リーンは新しいスツールに登り、棚を熱心に探し、見つけたぞ 『彫像体型論』だ。ため息をつき、まるで気力が湧いてきたかのように、彼は分厚い本を手に取り、急いで読書テーブルに向かった。テーブルに本を置き、椅子に腰を下ろし、表紙を開いた途端、心臓が喉まで飛び出しそうになった。ページが何枚かなくなっていたのだ。

「いやだ！」彼はページをめくりながら息を呑み、口に手を当て、驚きと深い恐怖が入り混じった目で目を大きく見開いて輝かせた。ページの半分近くがなくなっていた。破り取られていたのだ。「いやだ。いやだ！いやだ！」彼はテーブルから飛び上がり、閉まったドアに向かって走った。

「すぐにこのドアを開けろ！」リーンは叫びながら、拳でドアを叩いた。鍵がカチッと音を立てて錠が開き、彼は新たな力に突き動かされ、重いドアを押し開けた。

「誰がアーカイブにいたんだ？」リーンは叫んだ。

軍曹はどもりながら言った。「あなた方の、えーと、ただの、ただの枢機卿の方々が入場を許可されました。」

リーンは彼の顔に近づき、唸るように言った。「私は評議会の最後の生き残りだ。最後の生き残りだ！他には誰もいない！」

「マッソン枢機卿はどうなったのですか？」と兵士は尋ねた。

身を乗り出した彼は、顔がひどく歪んだ。「マッソン？そんな枢機卿はいない。」

「このマッソンは、あの決まり文句を知っていました、閣下！私の命令は、許可することです。」

「鍵を渡せ！」リーンは遮った。兵士は従った。リーンは鍵をロープの下に押し込んだ。「命令は分かっているぞ、衛兵！」リーンは気を取り直した。「教えてくれ、彼はどんな姿だった？服装は」リーンは自分の真紅のロープを指さした。「枢機卿のようだったか？」

「はい、猊下。彼は新しく選出された評議会メンバーだと名乗りました。また、聖下から特定の教会法記録を調査するために派遣されたと主張しました。そして、彼は猊下をよく知っていました。」

「軍曹、私が外典を訪れた目的は、聖下に外典に対する義務をお知らせするためです。聖下が何も知らない事柄について、どうして命令を下せるのでしょうか？」

「閣下、私の命令は。」

「なんてことだ」リーンは震える指の下でぼそぼそと呟き、目はあちこちをさまよっていた。

彼は床に伏せ、軍曹と向き直って目を細め、「その枢機卿マッソンはどんな人物だったのか？」と問い詰めた。

「自信満々で、まるで枢機卿のような風格だった。君の身長、金髪、色白の肌、ああ、そして片方の目は茶色で、もう片方は白！」兵士は左目を指差した。「こっちは盲目だったんだ。」

リーンは歯を食いしばり、心を固くした。あんな目つきの枢機卿はただ一人しかいない。

くそっ、とリーンは思った。ブラージ 大学が彼を唆したに違いない。

「彼に同行したのは誰だ？護衛か？」リーンは困惑した軍曹に問い詰めた。

「閣下、彼は一人で、ご自身の馬に乗って来られました。」

「一人で？」リーンは大きく息を荒げた。「軍曹、私は何十人もの護衛と装甲馬車を連れてきたんだ。枢機卿が護衛なしで宮殿の外、しかも街の外へ出かけるなんて、おかしいと思わなかったのか？しかも馬に乗って？」

「閣下、このマッソン、いや、この男は来るたびに、先ほど閣下がおっしゃったのと全く同じ言葉を私にささやきました。そうでなければ、私は彼を中に入れなかったでしょう。私の命令は。」

「命令は分かっています！」リーンは激昂した。「彼が来るたびに」と言ったが、軍曹、何回ですか？この侵入者に何回ドアを開けたのですか？」

「ここ数日で何度も」と軍曹は低い声で言った。「明日もまた来ると思う。」

閣下、彼を拘束しましょうか？

リーンは、クレメントが外典について知らなければ、ブラージの逮捕は彼を怒らせ、すでに不安定な状況をさらに悪化させるだけだと分かっていた。

「いいえ、軍曹」リーンは冷静に答えた。「彼が外典にアクセスするのを拒否すればいいのです。逮捕してはいけません。新しい評議会が彼をどうするか決めるでしょう。」すると、別の考えが頭に浮かんだ。「あなたはこれまで誰かにその通過儀礼の言葉を言ったことがありますか？」

「私が、閣下？いいえ、そのようなことはしておりません。命令により禁じられています。」

「決して？自分自身に対しても？」

「決してありません、閣下。」

その男はほぼ20年間、同じ扉の番をしていた。リーンは彼を疑う余地はほとんどなかった。その時、彼の心の中で何かが開いた。鍵が錠の中で回り、扉が開いたのを見たとき、不吉な真実が明らかになった時、彼はすぐにそれに気づいた。バジリス枢機卿は拷問を受けてあの言葉を自白させられたのだ。これは間違いなくブラージとバジリス殺害を結びつけるものだった。

「このことは誰にも言うてはならない。我々は私が来る前に通過儀礼の言葉を変えるだろう。」立ち去れ。誰もアーカイブの敷居を越えることはできない 私を除いては。あなたは私を集めるのか？

「はい、閣下。その通りです」と軍曹は慌てて同意した。

「もう一つ質問があります。侵入者は何か持ち込んだり、持ち去ったりしましたか？たとえ紙切れ一枚でも構いません。」

軍曹は答えた。「初日、彼は書庫から2冊の装丁本を持ち出したので、私は返却するように強く要求しました。私は彼を怒らせましたが、彼は従いました。それ以来、彼は何も持ち出していません。私はできる限り彼のローブを調べましたが、それでも私は

「彼は枢機卿だったのだから、身体検査を要求したのだ」と男は言い放った。頬を赤らめながら床の石を見つめ、「閣下、私もあなたと同じようにしたのです」と呟いた。

リーンは眉をひそめた。「これ以上この話はするな。ドアを閉めろ。」

「はい、閣下。」軍曹は背の高い扉を勢いよく閉め、リーンは法衣から鍵を取り出し、内側から鍵をかけた。そして読書用の机に戻った。

リーンは被害状況を評価し、破れたページからブラージが何を読み取った可能性があるかを把握した。彼はさらにページをめくった。

「ちくしょう！」リーンは欠落した箇所を叩いた。彼は本の奥深くを探したが、ナラムシン訳がすべて削除されていることに気づいた。

「ちくしょう！」彼はテーブルに拳を叩きつけた。その怒りは棚や床、そしておそらくは地球の核にまで響き渡った。リーンはクレメントを通して、ブラージが黙っているように仕向けるつもりだった。

「カー！カー！」かすれた声が聞こえた。「カー！」驚いたリーンは頭を上げて羽ばたくカラスが本棚の上に止まり、翼で空気をかき乱していた。リーンはゆっくりと立ち上がった。「一体どうして」鳥はリーンに飛びかかり、まっすぐ彼の目を狙った。

悲鳴を上げ、枢機卿はよろめきながら後ずさった。稲妻のように、黒い羽が鋭い嘴と爪で彼の顔を切り裂いた。血まみれになり、目が見えなくなったリーンは、後ずさりしながら大きな棚にぶつかり、転落した。棚が揺れ、カラスは飛び立った。膝をつき、血で目がかすんだのを拭いながら、リーンは鳥が最初に見た棚の上に静かに止まっているのを見つけた。ゆっくりと、彼は立ち上がった。

「ギシッ！」リーンは肩越しに振り返ると、揺れていた本棚が自分の方に倒れてくるのが見えた。彼は腕を伸ばして叫んだ。本と棚の雪崩 まるで山が土砂崩れのように彼の上に崩れ落ち、背の高い人にも聞こえるほどの部屋を揺らした。

扉が開いた。棚の側面に立てかけられていた松明が本の山の上に落ち、燃え上がった。すると、パチパチと音を立てる炎と、瓦礫の下敷きになった枢機卿のくぐもったうめき声以外は、静寂が訪れた。たちまち、カラスの姿は消えゆく煙の雲となって姿を消した。

「閣下！」軍曹は高い扉を叩きながら彼に呼びかけた。

ケースの下には、リーンが脚を骨折し、肋骨も砕かれた状態で横たわっていた。本や棚が四方八方から彼を遮っていた。煙が山積みになったものの中から立ち込めていた。「神様！助けてください！警備員！」彼は叫んだ。

煙は床面を伝って流れ、ドアの敷居の下で軍曹のブーツの周りに集まった。「羊を連れてこい！兵士全員を召集しろ！今すぐだ！」軍曹は部下たちに怒鳴った。彼らは散り散りになった。彼はドアを叩き、「枢機卿リーン！ドアを開ける！」

時間が経ち、煙は濃くなった。兵士たちが破城槌を持って戻ってくると、彼らは痛ましい涙を流しながら、そして息が詰まるような叫び声を上げながら、高い扉を叩いた。枢機卿が足から燃えている。

～*～

偶然にも、運命はブラージ枢機卿に味方した。リーンがあと一日でも生きていたら、ブラージは殺人罪で告発されていたかもしれない。教皇は外典の徹底的な調査を開始せざるを得なかっただろう。そして調査は

評議会が守っていた秘密が暴露されれば、たとえブラージが貧民の墓で朽ち果てていたとしても、教皇は間違いなく新たな上級評議会を任命しただろう。ところが、ブラージはまるで魔法のように障害を取り除かれて、自由に行動できるようになったのだ。

外典が炎に包まれた翌日、教皇の護衛官であるピトロ大尉が事故調査のために派遣された。ピトロは調査結果を携えて戻ってきた。枢機卿リーンの死と、文書庫の内容を焼き尽くした火災は、単なる事故だったというのだ。この件は棚上げされ、教皇庁はバジリステの殺害事件の調査を続けたが、さほど緊急性はなかった。フィリップ王の教皇宮殿訪問まであと2か月を切っていたため、宮殿の人々の心と口は政治でいっぱいだった。外典とその秘密は後回しにせざるを得なかった。何しろ、イングランドはフランス領の一部を占領しており、フィリップは現在の休戦協定の下で、北部の失われた領土を取り戻すために教皇クレメンスの助けを必要としていたのだから。

翌月にかけて、ブラージは盗んだ記録をじっくりと検討する十分な機会を得た。彼が特に興味を抱いたのは、ナラムシン訳であった。

彼はシャトー・ルージュの静かな空間で、その魅力的な文章を何度も読み返した。

もしこれらのことが本当なら、兄の亡霊は正しかったのだ、と彼は畏敬の念を抱きながら思った。このモノリスはエドワードをフランスから追い出すだけでなく、彼とすべてのものを押しつぶす力を持っているのだ。

彼と共にイングランドへ。

ブラージが教皇宮殿の回廊の中庭に足を踏み入れたのは、午後の早い時間だった。彼は、ジュリンが二人の召使いの少年を連れて敷地内を歩いているのを見つけた。少年たちの肩には、銀のボタンがちりばめられた、真夜中のような濃い青色の長い布がかけられていた。

「ジュリン枢機卿！少しお時間をください」ブラージはギャラリー越しに叫んだ。もう一人の赤い法衣をまとった枢機卿フィルムスがジュリンに合流した。フィルムスもまた宮廷の監督官であり、その職務ゆえに宮廷枢機卿の中で最も嫌われていた。彼は宮殿のあらゆる事柄を調査し、記録し、教皇に直接報告した。要するに、フィルムスは教皇の目であり耳であり、まるで既に教皇であるかのように振る舞った。次期ローマ教皇に選出された。しかし実際には、彼は自己中心的で詮索好きな人物に過ぎなかった。体。

「ジュラン、トゥーサン枢機卿の居場所を知っているか？」とブラージは尋ねた。フィルムスは口を挟んだ。「ブラージ、フィリップ王陛下のために、3つのワイン樽に印をつけたか？」

「昨日の朝、そうしました」とブラージはぶっきらぼうに答えると、ジュランの方を向き直り、「トゥーサンはどこだ？」と繰り返した。

ジュリンは肩越しにちらりと見た。「ついさっきまで、彼は私たちの後をつけていたんだ。もしかしたら

彼 ああ !彼が今来る。」
トゥーサンは両腕を支えながら回廊のアーチをくぐった
厚手の正方形の青い布を折りたたんだもの。

フィルムスはカーディナルズの間に顔を突き出し、ブラージの注意を引こうとした。「トゥーサンは陛下のボトル用木箱に詰めて印をつけたのですか？

ジュリンはこの質問を遮って言った。「彼はそうした。2日前の夜だ。」

トゥーサンは息切れし、顔色も悪く、一行に追いついた。「ジュラン、これ以上そこに立っていたら、布を落として汚してしまうぞ」と彼は怒鳴った。ジュランは、顔をしかめ、かなりの重さに耐えかねて足元がおぼつかない3人の少年召使いに気づいた。

「ああ、大変だ !落とさないで !宴会場へ !」ジュリンは召使いの少年たちに小言を言った。彼は振り返り、二人の枢機卿に挨拶をした。「ブラージ、フィルムス。」彼は少年たちを従え、急いで立ち去った。

「すぐ後ろにいますよ」とトゥーサンは彼の後ろ姿に呼びかけた。ブラージとフィルムスに頷き、明らかにジュランの後を急いで追う準備をしていた。フィルムスは彼の前に立ち、両手を後ろで組み、踵をついて後ろに下がった。「陛下は、ボトルの木箱が梱包され、印が付けられていることを確認するよう私に命じました」と、彼はトゥーサンを見下ろしながら、重要なことのように言った。「そうですね？」

「当然のことだ」とトゥーサンは言い返した。

ブラージは苛立ちながらうめき声をあげた。「つい最近、ジュランがトゥーサンが瓶を用意したと認めただけだ。」フィルムスはさらに頭を後ろに傾け、まるで高みからブラージを見下ろすように目を細めた。「確かにそうだが、私はトゥーサン自身の言葉を聞きたいのであって、他人の言葉を聞きたいのではない。ああ、それから教えてくれ、ブラージ、陛下のために印をつけたワイン樽のそばに警備兵を配置したのか？」

「そんな必要はなかった」とブラージは眉を上げて言った。「ワイン樽たちに、もし地下室から逃げ出そうとしたら、私が自ら酔い潰して殺してやると告げた。だから、奴らは逃げ出さないと約束したんだ」。彼の口元には乾いた笑みが浮かんだ。

トゥーサンは笑いをこらえた。

フィルムスの眉が陰しくなった。「枢機卿たちの冗談は聞いていないふりをしよう」と彼は冷たく言った。「ブラージ、イギリスとフランスが戦争中であることを忘れたのか？」

「陛下が毒を盛られてお亡くなりになった場合、おそらくあなたが個人的に責任を負うことになるでしょう。」彼はトゥーサンの方を向き、続けて言った。「衛兵司令官は衛兵室にいません。」

今日、彼を見かけましたか？

ブラージが口を挟んだ。「もしかして、私のワイン樽が無防備な状態で見つかったので、ピトロ船長に警備を依頼したのでしょうか？もしそうなら、私が警備を配置したかどうかを私に尋ねるのは全く無意味に思えるかもしれませんね。」フィルムスは憤慨したが、ブラージは彼に隙を与えなかった。「しかし、あなたは尋ねました。おそらく、

あなたが私を何か重大な職務怠慢で捕らえたと、教皇猊下を説得するのですか？
フィルムス、これが君の計画の意図なのか？自分を有利な立場に置くためか？

「聖座に対して私に悪い印象を与えることで、私との関係を悪化させようとしているのか？」

フィルムスは、箴言の一節を引用してこの非難に反論した。「愚か者は自分の考えをすべて口にするが、賢者はそれを後にとっておく。」

トゥーサンは、フィルムスの先の質問に答えることで、外交的に対立を収束させた。

「ポワンテ伯爵は到着し、要人棟にいらっしゃいます。ピトロ大尉もそちらにいらっしゃると思います、フィルムス枢機卿。」

「ええ、もちろんです」とフィルムスは同意し、自分の言葉でこのやり取りを締めくりたいと熱望していた。彼はトゥーサン枢機卿とブラージ枢機卿に丁寧に頷いた。「トゥーサン枢機卿、ブラージ枢機卿。」

ブラージは男が体勢を立て直すのに十分な時間を与えてから、彼に向かってこう呼びかけた。「通りすがりに、自分に関係のない争いに首を突っ込む者は、犬の耳をつかむようなものだ。」

フィルムスは、まるで箴言からの引用であるかのように、明らかに身を硬くしたが、まるで何も聞いていないかのように歩き続けた。

トゥーサンはこみ上げてくる笑いをこらえようと唇を噛み締めた。ブラージに身を乗り出し、小声で言った。「ピトロ隊長はあそこにいます。あなたの後ろに。」彼は中庭の奥にあるアーチをさりげなく指し示した。「あそこ、一番奥の柱の向こうです。彼は衛兵と話しています。」

「ああ、よくやった、トゥーサン。」ブラージは柱の方へ歩み寄った。柱の後ろにピトロがいるのを見つけると、彼の耳元で何かを囁いた。ピトロはブラージの囁きに頷き、それから衛兵に命令を下した。衛兵は振り返って大地下室の方へ急いで行った。ブラージは感謝の意を込めてピトロの肩を軽く叩き、トゥーサンのところへ戻った。

「友よ、話さなければならぬ。君に伝えなければならぬ重大な事柄があるんだ」とブラージはほとんど懇願するように促した。トゥーサンは、ブラージの執拗な視線、ひねりの手の動き、そして熱心な姿勢を観察した。ブラージの肩越しに目をやり、

「坊主！急いで来い！」と怒鳴った。耳の大きな従者の少年が、赤い服を着た枢機卿たちに用心深く近づいた。「閣下？」

「閣下、坊や」トゥーサンは彼を訂正した。「エミ・イ・ネンスだ。お前はジュラン枢機卿の部下の一人だろう？」

「はい、かしこまりました。」

「ご主人様は宴会場にいらっしゃいます。」トゥーサンは、そのみすぼらしい子供に厚手の絹の布を差し出した。「さあ、この布を彼に届けなさい。ジュラン枢機卿に、トゥーサン枢機卿がまもなくそこへ行くと伝えなさい。もしこの布を汚したら、お前は責任を取ることになるぞ。私の言うことは理解したか？」

「はい、閣下。」

トゥーサンはため息をつきながら資料を手渡した。「さあ、行きなさい。」少年は急いで

布を片付けろ。トゥーサンは言った。「地下室はダメだ。そこに警備員を送ったし、食料庫には使用人が配置されている。酒蔵室は絶対にプライベートな空間だ。」

「それで十分だ」とブラージは答えた。二人は一緒に中庭を出た。

2人の赤いローブを着た男は小声で話し、粗い木製の階段を上って酒屋に入った。トゥーサンは6つの部屋を点検して使用人を探した後、ブラージをボトル倉庫に合図し、そこで満杯と空の棚が迷路のように並ぶ中を取引し、彼らは部屋の奥の隅に移動した。そこは明らかに有利な位置だった。誰かが近づいてくるのを察知でき、侵入者が彼らのひそひそ話を聞かずと前に気づくことができたからだ。

ブラージが長い間話し続けている間、トゥーサンの顔には、衝撃、懐疑、恐怖、嫌悪、そして最後には露骨な不信感といった、相反する感情が入り混じった表情が浮かんでいた。

「そんな馬鹿げたことをどうして信じろと言うんだ？」ブラージが話し終えると、彼はきっぱりと言った。「まるで作り話みたいじゃないか！」

ブラージはこう弁明した。「私が言っている二つの修道院が教皇の税務記録に記されているのを見たことがありますか？ 公会議の目的をご存知ですか？」

さらに言えば、そのアーカイブには何が保管されているのか？なぜ公会議とその枢機卿たちが常に教会の選挙民とは別個の存在であったか、ご存知ですか？トゥーサン、私は外典の記録を見たことがあります。私があなたに告げることは、神とフランスの前で真実です。彼らはまさに地獄の門を守っているのです。」

「つまり、あなたは私にこう信じさせようとしているのですか」とトゥーサンはゆっくりと言った。「外典会議は、実際には地獄の門である石を守るためにこれらの修道院を建てたのだと？」

石に刻まれたこれらの碑文を口にすれば、地獄そのものが開かれるというのか。そして、この門石

トゥーサンはまるで口の中に不快な味が残るかのようになり、その言葉を口の中で長く留めた。フランス全土を救うというのか？ブラージ、お前は私が理性を欠いているからという理由で、長年にわたり教皇の同僚たちから尊敬されてきた宮廷枢機卿を私に集めたのか？彼は鼻を鳴らした。「お前のような無謀な主張は、白痴でさえ信じがたいだろう！」

「本当だ！理解しにくいかもしれないが、トゥーサン、誓って本当だ。」

「よろしい。」トゥーサンは口を固く結んだ。「仮にあなたが真実を語っているとしよう。同様に、ブラージ、あなたが評議会の修道院のどちらかに侵入する方法を見つけ、この厳重に守られた石を見つけ、地獄の門を開くのに適切な呪文を正確に唱えることができると仮定しよう。」トゥーサンはブラージをじっと見つめた。「そうだと仮定すると、あなたはどのようにしてその悪魔たちを説得するつもりだ？」

お前の命令に従うのか？この石からサタンの眷属が吐き出してきたら、お前は何と言う？「行け、イギリス人を滅ぼせ！」トゥーサンは耳障りなく、ほとんど叫び声に近い声で言った。

笑いながら。「檻から解放された鳥が命令に従って戻ってこないのと同じように、これらの精霊が一度解放されたら、なぜあなたに従う必要があるのですか？それに、言葉だけで石を開閉できるのですか？いいえ、ブラージ、あなたはまるで幻想的な興奮に襲われた捕らわれの子供のように話しているのです！」

「ゲートストーンには、開閉する以上の多くの側面がある」とブラージ氏は反論した。「それらは門に似ているが、開くことも閉じることもない。霊はそれらを通り抜けることができる。翻訳は聖書のように詩の形式をとっている。石に刻まれたこれらの言葉によって、そこから霊を呼び出し、あるいは返すことができるのだ。」

トゥサンは首を横に振った。「あなたはまだ私の質問に答えていません。なぜこれらの精霊たちは、あなたが解放した後も、あなたの命令に従わなければならないのですか？」

「翻訳によると、これらの門石から精霊を召喚し、命令することができます！」ブラージは必死に主張し、ボトルルームの分厚い壁板を拳で叩きつけた。「それに、まだあるんです。つい最近、素晴らしい幻視を見ました。クレシーでイギリス軍に殺された兄のジャン＝ジャックが私のところに現れたのです。彼はこう言いました」

「もうこんな馬鹿げたことはやめろ！」トゥーサン枢機卿は口走った。「私は宴会場に呼ばれている。もしかしたら、お前の兄弟の霊と、お前の石の悪魔たちを召喚できるかもしれないな」

あなたを助けるためではありません。異端審問があなたを異端として告発したとき、ジュリンも私もあなたの味方にはなりません、ブラージ。ああ、あなたが頼んだ通り、あなたの荒唐無稽な話をジュリンに伝えることは間違いありません。そして、彼はあなたを熱にうなされて完全に気が狂ったように連れ去るでしょう。

「私もそう思う。」トゥーサンは顔を背けた。

「いや、待ってくれ。もう少しだ」とブラージは彼に呼びかけた。

トゥーサンは話しながら立ち止まったり振り返ったりしなかった。「私はあなたとこの話をしたことは一度もないし、もしあなたが私にしたと主張するなら」

「ご自身で記録をご覧になりたいですか？」ブラージはボトルが並んだ棚の脇に回り込んだ。「私が持っていますよ。」

トゥーサンは突然立ち止まり、顎を撫でた。ブラージの無意味な主張はさておき、もし本当に評議会が長年厳重に守ってきた秘密の記録へのアクセスが許されるのであれば、どの枢機卿も評議会の記録を閲覧する機会を拒否するはずがない。

「では、その記録を見せてください。私自身で確認し、真実を見極めさせてください。もしそれが説得力のあるものなら、もっと詳しく聞かせてもらいましょう。そうでなければ、記録を返却します。ただし、この狂気じみた話でジュリンと私をこれ以上悩ませないという条件付きです。この件について私たちに話したことは、すべて忘れてください。ブラージ、あなたの約束は守られますか？」

「確かに、あなたはそれを手に入れた。では、私はあなたがこれらの記録を何としても守り、私的な調査の後には一枚一枚返却するという約束を、私も手に入れたのだろうか？」

「それらは私には必要ない。すべて返そう。約束は守る。」

「よろしい。」ブラージは安堵のあまり、ほとんど力が抜けてしまいそうだった。友人たちが彼の見たものを見れば、味方になってくれるかもしれない。「そして、私が真実を語っていると分かったら、あなたからの謝罪を期待します。」

「それなりに役に立つだろう」とトゥーサンは笑いながらも、どこか思案げに言った。この男の狂気はなんと滑稽なことか。とはいえ、外典の記録は

「合意しました。」

「夜明けとともに記録をお届けします。地下室に持って行きます。」そう言ってブラージは立ち去った。

トゥーサンはブラージが中庭を横切るのを見送り、ポテユリーを出るのを待った。いずれにせよ、その男はすでにこの狂気を他人に話しているかもしれない。トゥーサンは、2週間も経たないうちに異端審問官の拷問台にかけられるであろう男と一緒にいるところを見られるのは得策ではないと確信していた。

約束通り、翌朝ブラージは地下室で待っていた。彼はトゥーサンに外典のページを渡した。それは『スタチュー・フィジーク』やその他の装丁から引き裂いたもので、全部で100ページ近くあった。魅入られたように読みふけっているうちに、トゥーサンは次第に恐怖を感じ、ブラージの言葉が真実だと悟った。「すべて真実だ」と、彼は呆然として思った。「すべてだ」。その日の残りの時間、彼は書斎に座り、身動きもせず、食事も飲み物も摂らず、古代の文書が彼の周りに散乱していた。日が暮れると、彼は悪夢の霧の中から目覚めようともがくように、よろめきながら立ち上がった。「すべて真実だ」と、彼は誰もいない部屋に向かって囁いた。トゥーサンはページを慎重に集め、ジュラン枢機卿を探しに出かけた。

アヴィニオン市 ～ 教皇宮殿 ～ 1347年6月

教皇宮殿のコンクラーベホールには、宗教的な場面を描いた壁画や教皇の高官の肖像画が並んでいた。豪華な内装の上にはフランドルの壁掛けタペストリーが高く掛けられていた。ホールはそびえ立つ壁の下に長く広く広がっていた。床は天井の巨大な木材の下に海のように広がっていた。アーチ型の梁が屋根は逆さまにした船の船体に似ており、ノアの冒険にもふさわしいものだったかもしれない。ホールは宮殿の客間として使われており、訪問する高官のためのスイートルームで、どんな客にも適していた。王。

警備員や使用人がホールの入り口から出入りし、フィリップ王の荷物を解いていた。

荷物。「道を空けろ！」ドアの外から怒鳴り声が響いた。入口が空くと、ハルバードを持った衛兵たちが行進し、太った枢機卿を護衛してコンクラーベホールの奥へと進んだ。彼らは入口を通り抜け、豪華に装飾された宴会場に入ると、そこで立ち止まった。

部屋の中央には大きなダイニングテーブルが置かれていた。フィリップ王は、テーブルを見下ろす背もたれの高い柱椅子に一人腰掛け、ラム肉を堪能していた。彼は一人で食事をしていて、目の前のテーブルには、金銀の皿が並べられていた。彼の傍らには従者が立ち、いつでもワイングラスにワインを注ぎ足せるよう待機していた。

衛兵の一人がハルバードを床に叩きつけ、広間に向かってこう言った。「聖座のジュリン枢機卿は、フランス国王フィリップ陛下との謁見を求めています。」

「彼を中に入れてやれ」とフィリップは肉を口いっぱい頬張りながら咳き込み、怒鳴った。

衛兵たちはジュリン枢機卿が先に進むのを許し、向きを変えてホールから出て行った。それから二人は離れ、入り口の内側の脇でその場に立ち止まった。ジュリンはテーブルに近づき、頭を下げた。「陛下。」

フィリップは顔を上げ、脂ぎった顎を無造作に拭いながら言った。「枢機卿、いつものことながら、あなたの厨房は私の厨房に匹敵します。そのサービスは比類なきものです。ジュリン、私の厨房と宴会場の責任者になってほしいという申し出を考えてみてください。あなたの現在の地位を二倍、さらにそれ以上の報酬で報いましょう。教皇陛下のために、あなたが今していること以上のことは何も望みません。」

ジュリンは微笑んで再び頭を下げ、王室の料理への賛辞に顔を赤らめた。「陛下、大変光栄です。しかし、私の奉仕は教会に留まらなければなりません。」フィリップは首を振った。落胆の表情を浮かべる。

「さて」フィリップは銀の盆を指さした。「どうやら今回は私の従者ジュリンまで困惑させてしまったようだ。これは一体何だ？」盆の上には、小さな油ランプが2つ、3本の脚を持つ磁器製の器具、そして水の入った缶が置かれていた。中央には絹張りの箱があり、の絵が精巧に描かれていて、藁でできた仮設の巣の中に卵が1つ入っていた。

「よろしいでしょうか？」とジュリンは尋ねた。

「もちろんです」とフィリップは、描かれたを見つめながら同意した。ジュリンは部品を組み立てた。「ジェノヴァの貿易船から手に入れたんだ。君も気に入るんじゃないかと思ってね。」彼は2つのランプとブリキを所定の位置にはめ込んだ。次に卵を取り出し、装置の中に滑り込ませた。「ランプに火をつけないとね。」

「炎を持ってこい」フィリップが指を鳴らすと、従者は出て行き、炎を持って戻ってきた。ジュリンはランプに火を灯した。「ランプの油はいい香りがします。さあ、あなたが食事をしている間に卵は調理されます。食後に召し上がってください。」炎が卵の下の水の入った缶を温めた。別の炎が卵の後ろ、凹面反射板の前で燃えていた。集束された光が

卵の中を覗き見ることができた。

フィリップは中を覗き込み、不透明な光の中に浮かぶ卵の濃い黄身を発見した。「これは絶対に欲しい。この三本足の奇妙な物体の名前は何か？」

「お好きなように呼んでください。陛下のものですから」ジュリンは微笑みながら、従者の前に手を伸ばしてフィリップのゴブレットに飲み物を注ぎ足した。「少しお話してもよろしいでしょうか？」

フィリップは従者を制止し、椅子の方へ手を差し出した。「座りなさい、ジュリン。話せ。」ジュリンは椅子に体を押し込んだ。

「卵の窓だね」フィリップは突然ニヤリと笑いながらつぶやいた。

"陛下？"

「その名前は」フィリップはの装飾が施された三脚を指さした。「卵窓だ。中が見えるからね。」

「卵の窓 実に素晴らしい名前だ。」ジュリンは咳払いをした。「陛下、もしよろしければ エドワードと クレシーでの大変不幸な出来事について、陛下の助言を求めてお越しになったと伺っております。」

「では、誰かがあなたを惑わせたのだ」とフィリップは冷たくよそよそしい口調で言った。「助言は水のようなものだ。どこにでもあり、常に変化している。助言はいくらでもある。パリには溢れている。私には軍隊が必要なのだ。」

「陛下、もう少し率直に申し上げてもよろしいでしょうか」ジュリンは身を乗り出し、小声で囁いた。話している最中に、門番たちの姿がちらりと見えた。

「衛兵！下がれ！」フィリップは叫んだ。兵士たちは大広間から出て、閉ざされた扉の向こうに姿を消した。彼は背もたれにもたれかかり、ジュリンが外典の守護者の門石と、それがイングランドに対する武器として利用できる可能性について語るのを耳を澄ませた。

ジュリンは、国王が十分な兵士を貸し出して支配権を握ることで、どのように助けることができるかを説明した。ゲートストーンのこと。

「ですから、お分かりいただけたと思いますが」とジュリンは説明を締めくくり、「状況は極めて深刻であり、皆様のご支援が不可欠です」と述べた。

「ああ、もちろんだ。もちろんさ」とフィリップは言い、肉の最後の一口を飲み込んだ。

フィリップは頭を下げ、ナプキンをつかんで口に押し当てた。すると、むせび泣くような声が聞こえた。国王の顔は真っ赤になった。

ジュリンは席から立ち上がった。「陛下、陛下？」ジュリンはテーブルから水の入ったゴブレットをつかんだ。

フィリップはナプキンを落とし、頭を後ろに反らせて大声で笑い出した。ホールには彼の陽気な笑い声が響き渡った。彼はくすくす笑いながら咳払いをした。「精霊？幽霊の大群？そうだ、私の幽霊で奴を滅ぼしてやる。そうだ！私の信頼する幽霊で！」フィリップは天井を見上げ、大げさな皮肉を込めて叫んだ。「エドワード、出て行け、さもないと私は

我が亡霊を召喚して、お前を襲わせてやる！

ジュリンはゴブレットを置き、椅子に深く腰掛け、意気消沈した様子で言った。「陛下、私は真剣です。」

フィリップの顔は険しくなった。彼は片肘をついて身を乗り出し、睨みつけながらささやいた。「私も同じだ！」
ジュリン、私は既にクレシーで幽霊の軍隊を編成した。彼らを連れ戻せ。私の軍隊を連れ戻せ。彼らにエドワードへの復讐を果たさせろ。お前の石にそんな魔法を紡ぐ力があるか？

ジュリンはさらに説明を試みた。「ゲートストーンは 一種の機械ではあるが 」

フィリップはテーブルに腕を組んで彼の話を遮り、「では、仮にあなたがこれらの幽霊を解き放つことができたとしてもしょう。

それでどうするのですか？どうやって彼らにエドワードを滅ぼすように頼むのですか？教えてください、

ジュリン、幽霊はどうやって殺すんだ？もしかしたらエドワードを驚かせて殺すのか？彼は自分の

テーブルに拳を叩きつけた。ジュリンはびくっと身をよじり、後ろにのけぞった。「馬鹿げてる！俺に必要なのは温かい体だ 男の人だ。」

戦闘訓練を受けた！武器が必要だ。金も必要だ。エドワードを脅かしたければ、彼の首と、彼が殺したフランス人全員の首を満載した船を差し出せばいい！」フィリップの目は氷のように冷たく、ジュリンは視線を落とした。

フィリップは気を取り直し、椅子に深く腰掛けた。「残念ながら、枢機卿、私の信念は 何と言えはいいでしょうか

あなたの信念ほど洗練されていません。私は戦いは血と汗と十分な物資を備えた軍隊によって勝利するものであつ

て、幽霊によって勝利するものではないと考えています。私は助言や祈り、約束、あるいは魔法の石の話の間くためにアヴィニオンに来たのではありません。ご存じのとおり、聖座はフランスとイギリスの両方から税金を徴収しています。フランスは防衛のためにその資金を必要としており、私はフランスの国王として、フランスの名においてここに来たのです。」

「陛下、ほんの数名の兵士と共に、私は 」

「いいえ、枢機卿。私の考えはこうです。私は、陛下があなたを唆したのだと信じています。陛下は私に融資をするつもりはなく、あなたにまた別の約束をさせようとしているのです。ただし、今回は忌まわしい幽霊の大軍を。」
フィリップは装置から卵を取り出し、椅子に深く腰掛け、殻をむき始めた。「クレメントに、彼の小さな策略は失敗したと伝えてください。」

ジュリンは椅子から飛び上がった。「いいえ！陛下は私を遣わされたわけではありません！陛下は私があなたに話したことを何も知らないのです！そして、これから知らないままではいなければなりません！」

フィリップは凍りつき、震える枢機卿を鋭い視線で睨みつけた。

ジュリンはぎこちなく席に着き、頭を下げた。「お許してください、陛下。私は頭の悪い愚か者。」

フィリップは卵の殻をむき始めた。「君には、僕が想像していた以上に多くの秘密があるんだね。」

ジュランよ、よく考えてみろ。もし聖下がフランスとイギリスから徴収した税金と同額の融資を私に与えてくださるなら、私はお前の馬鹿げた大義のために私の軍隊の一部を貸し出すことに同意しよう。
もし教皇が拒否されるなら、おそらく皆が教皇がこの異端の石をどのように隠しているかを知ることになるだろう。」

「しかし陛下 !このことについては口外してはなりません」

「枢機卿、私は何をしてはいけないか指図される筋いはありません」とフィリップはきっぱりと反論した。彼はテーブル越しに身を乗り出し、小声で言った。「私の融資を保証すれば、兵士を差し上げます。それが合意です。さあ、私は休まなければなりません。」

"陛下-"

「もう十分だ、ジュリン。私たちは一度も話していない。」フィリップは振り返って廊下の向こうに叫んだ。「従者、私は
「終わった !衛兵、入れ !」衛兵が再び現れた。「枢機卿様を見送って !そして私の部屋を片付けろ !今夜はもう訪問者はお断りだ !」

「はい、陛下。」ジュリンは立ち上がり、お辞儀をして、憂鬱な表情で衛兵たちの後について扉へと向かった。

~*~

翌日、フィリップとクレメンス、そして彼らの公証人たちは財務省の広間に集まった。その時になって初めて、クレメンスはフィリップの融資要請が相当な額であり、教皇宮殿の建設を遅らせるほどの規模であることを悟った。
噂が広まり、廊下をささやき声が伝わった。会議はうまくいかず、ほとんどの教皇庁職員は、怒り狂う教皇をそっとしておくのが賢明だと分かっていた。また、ほとんどの職員は、クレメンスがフィリップに与えるのはほんのわずかな分け前と約束と祈りだけだろうと確信していた。怒りと恐怖に駆られたジュランはトゥーサンに近づき、トゥーサンは同じように切迫した懸念をブラージに伝えた。クレメンスが彼らの意図を知ったら、3人全員を学院から追放し、破門し、投獄するかもしれない。ブラージは彼らの不安を鎮め、不可能に思える任務を遂行するために動き出した。

正午、ブラージは警備所に入り、警備兵に近づき、耳元でささやいた。警備員は何度かうなずき、ブラージは彼に手紙と金貨をそっと渡した。

「誰にも一言も漏らすな。さあ、準備しろ。奴が来るぞ」とブラージは目を細めて命令した。

「はい、閣下」と、ブラージが走り去ると、衛兵は頭を下げた。
要人棟で、フィルムス枢機卿は衛兵ホールに入った。指示通り、衛兵はフィルムス枢機卿に近づき、手紙を手渡した。

「閣下」と衛兵は頭を下げた。

「ええ、一体何なの？」とフィルムスは鼻を鳴らした。

「中庭でこの葉っぱを見つけた。警備員の命令書には見えない。何か重要なものかもしれないな？」

フィルマスは手紙を読み、唇をすぼめて、衛兵の目をじっと見つめた。

「字が読めますか？」

「いいえ、閣下。」

「では、それが何でないかをどうやって確信できるのですか、 フィルマスは彼に質問した。

衛兵は防御的に答えた。「そのような命令書の見た目はよく知っています。ほとんどどれも同じように見えます。この紙には貴族の印はありません。」

「この葉っぱを誰かに見せましたか？」

「ついさっき見つけたばかりなんだ。君が初めて見る人だよ。」

「よろしい、では返してやろう。この葉っぱのことは誰にも話してはならない。お前が見つけたわけではないのだ。私の言っていることが分かるか、兵士よ？」

"私はします。"

「もしその話を聞いたら、説明を求めるために呼び出します。さあ、職務に戻りなさい。」

「はい、閣下」衛兵は頭を下げて立ち去った。フィルマスは貪欲と罪悪感を瞳に宿しながら周囲を見回し、手紙を胸に抱きしめてもう一度読み返した。

これらは陛下の条件です 陛下を説得した枢機卿に、融資額の10分の1を秘密裏に与えること。 _____

全額を貸し出す。もし貸付額が当初の要求額を超える場合、国王陛下は枢機卿が超過額の10分の1を受け取る権利があることにも同意する。この紙を燃やせ。
誰にも話すな

フィルマスは廊下を見回し、詮索好きな視線がないか確認した。誰もいないことを確認すると、手紙をロープの下に滑り込ませ、急いでその場を立ち去った。遠くの影からブラージュが彼を監視していることに、彼は気づいていなかった。

1時間以内に、フィルムスは宮殿の四窓の部屋に立ち、クレメントにフィリップが要求したよりもさらに大きな融資をするよう説得し、より高く、より頻繁な払い戻し。議論は白熱した。クレメンスがこれほど怒っているのを見たのは滅多になかった。しかし、クレメンスは公務においてフィルムスの助言をしばしば頼りにしていた。結局、教皇は渋々フィルムス枢機卿の提案に同意した。

その夜、フィリップ王とクレメンス教皇は文書に署名した。この取引から、フィリップはエドワードの首が切り落とされる光景を思い描き、フィルムスは自分が教皇の玉座に座る姿を想像し、ブラージュは亡くなった兄弟たちの顔を思い浮かべた。トゥーサンとジュランは自分がフランスの枢機卿になる姿を想像し、クレメンスは巨大な教皇機構の創設がさらに遅れることを予見した。この取引は全員を満足させたが、クレメンスと彼の財務官、そして

教皇侍従。

翌朝、フィリップ国王はジュラン枢機卿をコンクラーベ会場に召喚した。

フィリップは、すでにその前に座っていたフィルムス枢機卿と手を組んで、指定された席に着いていた。そこにジュランが紹介された。枢機卿たちは互いに視線を交わした。どちらも相手の用件に強い関心を抱いていたが、相手がいる前ではどちらも口を開く勇気はなかった。

「ああ、ジュラン枢機卿、どうぞ」フィリップは彼に手招きして前に出るように促した。

ジュリンは頭を下げた。「陛下。」

フィリップはフィルムスの方を向いた。「フィルムス枢機卿、何かおっしゃっていましたか？」

フィルムスは咳払いをした。「陛下、何かご用でしょうか？」

「陛下は枢機卿を遣わして、王室の賓客の世話をさせるというのか？私は自分の召使たちを連れてきたのに。一体何のために、私はこのような特別な待遇を受けるに値するのだろうか？」フィリップは顎を撫でた。

「いえ、陛下。」フィルムスは咳払いをして、ジュリンをちらりと見た。「陛下、もしよろしければ、お二人で少しお話させていただけないでしょうか。」

「確かに。ジュリン枢機卿、少々お待ちください。フィルムス枢機卿、こちらへお越しください。」ジュリンは一礼してホールを後にした。

フィルムスは小声で言った。「陛下。私です。陛下の融資を確保したのは私です。賠償について話し合うために参りました。」

フィリップはくすくす笑った。「教会にも腐敗がないわけではないようです。分かりました、枢機卿。宮殿の地下室にワイン樽が3つあるはず。1つはあなたにお渡ししましょう。もちろん、贈り物ということにしておきましょう。」

フィルムスは身をよじった。「陛下、それはお受けできません。よろしければ、融資額の10分の1についてお話しさせていただきたいのですが。」

フィリップは呆然とした。「10分の1？融資額の10分の1を賠償金として？」

「10番目の謝礼は、陛下、教皇陛下を説得して融資を承認していただいたことに対するものです。」

フィリップは顔をしかめた。「枢機卿、私が差し上げるものをお召し上がりください。それだけでも十分すぎるほどです。さて、ワインはいかがですか？」

「陛下は決してそれをお許しにならないでしょう。陛下、協定の条件を記した紙片をお持ちいたしました。」フィルムスはローブから紙片を抜き取り、フィリップはそれを読んだ。彼は眉を上げた。

「これは一体何だ？誰が私のことをこんな風にしたんだ？」

「陛下、ご存じないのですか？」

「そんなことは一切言っていない。賠償については、この件に関して沈黙を守ることで十分です！」

フィリップは紙をベストに滑り込ませた。「もしあなたが、あるいはジュリン枢機卿が、融資の一部を自分たちのために期待して私に近づいてきたと誰かに話したら、私は彼に報告します。」

陛下、あなた方二人は彼に対して陰謀を企てた。私が沈黙を破る前に、私を放っておいてくれ！

「はい、陛下。」フィルムスは険しい表情で一礼し、部屋を出て行った。外に出ると、ジュリンを一瞥し、顔をしかめてから、慌ただしく廊下を駆け下りていった。

「ジュラン枢機卿を招き入れよ」と国王は命じた。衛兵たちはそれに従った。フィルムスはジュリンが近づいてくると、ベストから紙を取り出し、指でゆっくりと扇いだ。彼はジュリンを見つめ、ジュリンもそれがブラージのメモだと分かっているその紙を見つめた。フィルムスは大声で笑い、葉っぱをベストに戻した。

「ジュリン、君は本当に機転が利くね。安心してくれ。すべて順調だ」とフィルムスはくすくす笑った。「私はただ君に私の融資の保証人になってもらうよう説得しただけだ。君はそれをうまくやってくれた。私が君を陛下の身の危険にさらしたことは忘れていいよ。彼は再び笑った。「陛下が君を派遣したわけではないことは分かっていたよ。」

お前たちのことはよく知っている。ああ、そしてフィルムス枢機卿は、お前たちも褒美目当てで来たと思っている。もしお前たちのどちらかがそれについて何か告白したら、私はその件を教皇陛下にお伝えください。

「陛下、心より感謝申し上げます。」ジュリンは微笑みながら頭を下げた。

「さて、あなたの幽霊の魔法の石についてですが、厳しい条件付きで私の兵士たちを差し上げましょう。第一に、陛下にはそのことを決して知られてはならない。第二に、私の兵士たちは数日間のみあなたのために奉仕する。」

「承知いたしました、陛下」とジュリンは答えた。

「ボーン大尉とその部下を派遣しよう。私は彼を信頼している。すべての事情を知っているのは彼だけだ。部下には何も話すな。彼が指揮を執るだろう。」

「もちろんです、陛下。」

「彼は現在アヴィニオンにおり、200人の兵士を率いている。それで十分だろう？」

ジュリンは首を横に振った。「確かにそうだ。多すぎる。」

「念のため申し上げておきますが、我々はイギリスと戦争状態にあります。ボーンは兵士たちをまとめ、無駄な分裂によって戦力が弱体化しないようにしています。私は彼の指揮能力と直感を信頼しています。彼は私の近衛兵の中でも最高の人物であり、たとえ短期間であっても、彼に戦力の分散や指揮を任せる必要はないと考えています。ですから、提案は200人か、さもなくば無かです。どちらになさいますか、ジュラン枢機卿？」

「200です、陛下。」ジュリンはため息をついた。

王はげっぷをし、深呼吸をして、椅子に深くもたれかかった。やがて彼はただ王はジュリンをじっと見つめ、疑わしげに視線を細めた。そして、まるで永遠にも思えるその瞬間、ジュリンは頭を下げ、王が申し出を再考し、怒って自分を退けるのではないかと半ば覚悟していた。音もなく、凍りついたように下を向いたまま、ジュリンは死のように静まり返った広間の果てしない広がり、重くのしかかってくるのを感じた。

彼の肩に重くのしかかる重圧 残された沈黙は耳をつんざくほどだった。募る不安が彼の首筋と顔を焼き、彼は自分の高いアーチ型のホールから逃げ出したいくてたまらなかった。彼が突然許可を得たならば、同意しただろう。

「わかった」とフィリップ王はついに怒鳴った。「では、詳細を話せ。ボーン大尉はいつ、どこでお前と交戦するのか、そしてお前は彼に何を要求するのか？」

[第4章終了]



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~